
ハイスクールG × B

ムラサメ 5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールG×B

【Nコード】

N9568W

【作者名】

ムラサメ5

【あらすじ】

「ハイスクールT×M」の修正版です。文才がないのでご容赦ください。型月は設定だけです。

かつて、一つの神器が原因で、出逢ってはいけない二人が出会った。時は流れ、宿命の子供たちは出逢い、戦い、その果てに希望を見た。今、次元を超えた奪還が始まる。

はじめに（前書き）

修正しました。

はじめに

前回、投稿した小説の修正版です。

滅茶苦茶な設定もおおまかには決まったのでそっちの方向で。

文才が皆無ですが、長い目で見てやってください。

原作はクロスオーバーさせるので改変されています。

そういったものが苦手・嫌いな方は戻るボタンを。

以下、オリ主設定です。

美堂 銀

オリ主。転生者ではないが、チート。

人間？と悪魔のハーフ。

容姿は、赤毛の代わりに銀髪が混じった「うみねこのなく頃に散」のウィラード・H・ライト。

性格は父と母を2で割った感じ。

学生の身でありながら奪還屋を兼業（むしろ本業）。

頭脳はあの親にしてこの子在り、優秀。チェスも強いが両親には勝てない。

母親がチートの元メイドさんなので、某借金執事さん並みに家事諸々が得意。

神器のせいでウツカリ属性持ち。F a t eでいうならランクEX。

神器：「全て遠き理想郷」

ぶっちゃけ型月のアレ。平行世界の一つに存在するUBWgood

END後に赤い悪魔さんが第二魔法共々吹っ飛ばして現在に至る。鞘の中には固有結界「無限の剣製」（チート化したエミヤシロウ）と第二魔法「平行世界の運営」（チート化した遠坂凜）、宝具「約束されし勝利の剣」（チート化したアルトリア・ペントラゴン）が内包されている。禁手化や覇龍以外に超越というオリ設定が存在するチート。他にもオリ設定があるがその情報は公開されていない。追記：実は、オリ主の両親が次元を超えて出会えたのはこの神器のおかげ。第二魔法はチート。

聖痕：もちろん刻まれました。ここでも「創世の王」は相棒です。

邪眼・蛇遣い座の力：持ってます。寿命の問題はハーフで解決。

兵藤 一誠

原作キャラで最も改変された人物。当然チート。

雷帝の力を所有する現「赤龍帝」。

もちろんタレます。エロくなく、女性には紳士的。これもオリ主の母による矯正の賜物。

現在の住居は、オリ主とその家族が営む喫茶店「Honky Tonk」。

神器は原作に沿っているが、原作前に覚醒しているためチート。

雨が降っていた。

瓦礫の都と化した街の中心にある教会で、二人はただ濡れているだけだった。

絶望という名前がついた空気が支配する世界で二人はただ目の前の存在を睨みつける。

「合わせろ、一誠」

ただ一言。一つの言葉を発するだけで身体全体の骨という骨が軋む。

「ドライグ、僕の全力受け止めてね」

本来ならば流れていなければならない血は枯れ果て、傷はただ疼くばかり。

「ほう、まだ動けるのか」

少年たちの声を聞き、その存在はただ見据えるばかり。

無防備ともとれるその仕草に何度目か分からない苛立ちと絶望を感じながら、少年たちは構え、ただ力を蓄える。当てようとする必要はない。この目の前に君臨するゴスロリの少女は避けようとすらないのだから。

美堂銀は集中する。突然現れ、破壊の限りを尽くした目の前の少女を見据えて。完全に化け物となった自分の右腕に力を集めて。その理不尽に一矢報いるために。

兵藤一誠は思考する。ここ数日の間に起こった自分の変化を。敵として表れて、友として和解して、今も隣で少女を睨みつける少年の事を。まだそんなに話をした訳ではないけれど、それでも共に闘ってくれている龍の事を。

勝敗なんか関係ない。これは元から負け戦だ。

死に行くわけじゃない。まだやりたいことはたくさんある。本当は逃げ出したい。こんな寂しい場所で死にたくない。でも、

こんな理不尽には負けたくない。ここで逃げたら意味がない。無表情のまま嗤う少女に屈したくない。まだ動けるんだ。なによりも、膝を屈したままの自分が赦せない。

「オオオオオオ、うおおおおおっ！」

ただ、思うがままに力を解き放つ。目の前の存在に牙をむく。それでも、怪物は嗤っていた。そう、嗤っていた。

「見事、人の子よ」

一瞬の交叉、それでも立っていたのは少女だった。

この日、南欧地方のとある田舎町が地図から消えた。

この三日後、グレモリー家次期党首リアス・グレモリーに二人の巻族悪魔が生まれた。

L i f e ・ 0 (後書き)

設定の都合上、一誠を原作まで生存させるにはこうでもしないとね。

一誠は原作通り、「兵士」です。

雷帝×赤龍帝って…。

次の更新は近日中に。

A c t Ⅰ 失われた刻を奪り還せ！？（前書き）

すいません。

またやらかったです。

A c t 0 失われた刻を奪り還せ！？

世界を創り上げる者に大いなる試練を与えよう

世の地獄を這い生き残る者に創生の権利を与えよう

その心に刻まれし幾多の試練…

その試練こそがよりよき世界を創造してゆくのだ

誕生

絶滅

進化

発展

新たなる生命の創造を

新たなる未来の創造を…

さあ　始めよう…

『一悪鬼と化した神と悪魔の闘い《オウガバトル》を…！』

傷だらけの男たちの闘いは壮絶だった。ミイラのように包帯を巻きながらも、なお血が滲むような体でイレた一撃は軽々と兵藤一誠を突き飛ばした。その衝撃波は、床、壁、瓦礫。あらゆるものを破壊しながら土埃を巻き上げる。あらゆる法則を無視する力はセカイのルールを一つ、また一つと破壊してゆく。

「　凄まじい衝撃波だ」

「　本気でイレやがった」

「　一誠でなければ今の一発で蒸発していただろう」

その光景を余波を受けずに観測する者たちがいた。観測者、監視者、審判。彼らはこの闘いの行く末を見守るだけの存在だった。

「　銀　ちゃん」

「　始めようぜ一誠　『一悪鬼と化した神と悪魔の闘い《オウガバトル》を…！』」

「　…！！何で　オレと銀ちゃんが闘わなきゃならないんだよ…？」

さっきまで相棒として、Get Backersとして勝利を分かち合っていた二人。美堂銀は全てを理解した上で拳を振るい、兵藤一誠は未だ何故自分が攻撃されているのか分からないといった風体で一撃一撃を受け入れる。

「手ぬるいわよ銀!!」

「」

銀髪の漆黒のドレスを身に纏った美女―銀の母親―グレイフィア・ルキフグスはその闘いの中でなおも銀を闘いに追い立てようとする。冷徹な仮面、秀麗な佇まい。その姿は、まさしく女王だった。

「な　なんで止めないのよグレイフィア!」

そんなやりとりに一人、意味を理解できずリアス・グレモリーは闘いを止めようとする。がしかし、その動作はグレイフィアが突き出した右腕によって阻まれる。大きな殺気と得体の知れない緊張感と共に。

「幸福の名のもとにセカイを均一化しようとした神の横暴に反逆し墮天使は地獄に下った。その墮天使を神は悪魔と呼んだ。貴方は神に鉄槌を下すため悪魔の手と邪悪な瞳を従え生まれてきた男
神の横暴を打ち碎きなさい!」

「や　やめてよ銀ちゃん」

先の発言が聞こえなかったのか。ボロボロの体に鞭を打ってなおも一誠は立ち上がる。

「銀ちゃん　!!」

「来い　一誠　!!」

一誠の掛ける言葉に耳を貸さず、銀はそれがさも当然であるかのように寿命を削る悪魔の腕の封印を解く。右腕はもう既に原形を留めておらず。そのほとんどが歪な外殻に覆われている。

「銀ちゃん」

しかし、その言葉は虚しいだけだった。悪魔は神をひたすらその力で蹂躪する。ワンサイドゲーム。一方的すぎるその闘いは、殴る、掴む、殴る、払う、切り裂く、掴む、殴る、突き飛ばすの連続だった。まるで人形を相手にしているかのように。一誠は一切の抵抗をしなかった。

その闘いを見守る中で、グレイフィアは語る。

「この闘いは聖なる戦い。勝者はすべてを手に入れ 敗者はすべてを失う。『一悪鬼と化した神と悪魔の闘い《オウガバトル》』

こそセカイのすべてを賭けた ハルマゲドンなのよ」

「ハルマゲドン？」

「一誠 何をしている！！悪魔を斃せ！！お前のその力で！！お前ならセカイを美しいユートピアに出来るはずだ！！」

「悪魔」

「闘え！悪魔は容赦しないぞ！このまま殺されて悪魔にセカイを委ねてしまっていないのか！？お前は両親の残した意志を無にするのか！？」

死に体の一誠に天子峰猛——一誠の叔父——は一喝する。そんな一誠に銀は、一步また一步と近づいていく。

あと一步のところで足を止めると、銀は両目に宿った聖痕を通して問いかける。

「立て 一誠」

しかし、一誠は既に虫の息で立つこともままならない。

「もう雷帝はいねエ。目の前の現実から逃げこむ場所はどこにもね

エゾ。俺と戦え 全力を尽くして」

それでも、それでも一誠は自分の意志を曲げない。気絶。死んでいてすらおかしくない身体で芯にある根性一つで意識を保つ。

「できないよ銀ちゃん オレは闘えない」

「 そうか」

「 銀」

悪魔の腕を下げた銀を見て、リアスは束の間の安堵を得る。しかし、悪魔の腕はその一瞬で容易く一誠の身体を貫いた。

「 銀!？」

さっきまでとは一変した焦った悲鳴を上げるリアス。その隣でグレイフィアは無表情で闘いの行く末を見守る。天子峰も美堂蛮も同じ。この場にいる観客は全員がひたすらにその役目を果たそうとする。グレイフィアは銀の母親として悪魔を導き、天子峰は一誠の父親代わりとして救世主を導く。

槍と言っていい三本の悪魔の爪に身体を貫かれ、引き抜かれた瞬間に大量の鮮血が飛び散る。

そして、銀が突き付けた現実は、

「 お前 ここで死ぬか?」

残酷だった。

それから数発、ミサイルのような一撃を放つ拳を喰らい、一誠は満身創痍の状態で倒れた。

意識もあと数分持つかといったところだ。

その一方的な拳戟を見守りながら、蛮―銀の父親―は齒を食いしば

る。

「」

一瞬だが目を逸らした父に対しても銀は辛辣な言葉を浴びせる。

「どこ見てる クソ親父？ テメエはジャッジなんだろうが」

「！？」

「だったら最後まで見届けろや」

「。そうだったな銀」

「マスター」

もう生きているのかさえ分からない。そんな状態で一誠はかすれた言葉を搾り出す。

「見届けさせてもらっぜ一誠 お前の闘いをよ」

「オレの 闘い ？」

月となったアーカイバの眼が天空より見守る中、蛭の声は淡々と『グラウンド・ゼロ』に響く。

「ずっと 強くなりたかったんだろ？ 銀や”強さ”に憧れていたんだろ？ そんなお前がこのまま何もできずに終わっていいのか？」

「」

「見せてみるや、一誠。お前の探し求めていた”強さ”ってやつをよ」

（お前が美堂銀か）

（あいつ 死ぬのが怖くないのかな）

（帰る場所がないならついて来いよ。お前が言ってる”何か”ってのを知ってる奴らがこの裏新宿にいるんだよ）

（私にとって過去は奪り還すものではない。償うものなんだよ）

（いい夢見れたかよ？ オッサン）

（ほんの一瞬だけでも奪い返してやるーかなって思ってたよ。不幸ってヤツに持ってたかれちまったあの二人の一番幸せな時を な）

（楽器に頼らなくては最高の旋律が出せないようでは巨匠アントニ

オ・ビスコンティの弟子だなんて言えませんか)

(生きてりゃいいこといっぱい見つかるよ。だから生きてみるよM
AKUBEX)

「強さ」

(カイトは言ってたよ。この絵は自分がこの世で最も愛した女神な
んだって)

(頑張ッテ生キル、命—)

(この街はゴミ捨て場にぶちまけられたオモチャ箱だ。お前らの仕
事はその中から絵になりそうな”パズル”を拾い集めていくことな
んだよ。引き受けたからにや最後までやり遂げる。最後の1ピース
はめるまではどんな絵になるかわからねえもんだ。それが奪還屋の
仕事—)

「オレの 強さ—」

「来るのか来ねエのか決めろ一誠。来ねエなら終りにすんぜ？」
一歩、一歩。悪魔は少しずつ近づいてくる。

「オレの」

「我こそはアクレスピオスの使者なり その呪わしき命運受け入
れし者にのみ賜うべきは讀蛇の牙に秘められし高き天と深き地獄の
力なり されば愚かなる者共に鉄槌を打ち下ろせ」

銀の中のアクレスピオスの力が解放される。

「銀」

「強さ—」

「荒ぶる神魔の、怒りを以て!!」
最後の呪文が紡がれた瞬間、

一誠の左腕は切り飛ばされた。

「今 楽にしてやるよ」

銀は構わず返しのとどめを刺そうとする。だが、

「オレ達、GBなんだよね？」

一誠は残された右腕のみで銀を抱きしめていた。

「GETBACKERSの『S』は一人じゃないってことだつて、そう言ってくれたのは銀ちゃんだよ。だからオレは銀ちゃんと闘わない。銀ちゃんの強さに憧れて 追い求めてようやく解ったよ」

「オレが憧れた銀ちゃん オレが追い求めた姿は その強さよりもずっとずっと、優しいって」

身体中を血塗れにしているも、その顔は穏やかだった。

「それがお前の答えなのか？」

「うん」

「俺を信じるのが お前の答えなのか？」

「うん」

「ジャスト一分だ」

その言葉と共に空間に亀裂が入る。割れたその先には、GetBackers 美堂銀の穏やかな笑顔があった。

「オメエの勝ちだよ一誠」

「いい悪夢、見れたかよ！」

A c t 0 失われた刻を奪り還せ！？（後書き）

感想や至らぬ点、訂正があればどうか教えてください。
では、また次回。

A c t 0 失われた刻を奪り還せ！？（前書き）

ちよつとだけハイスクールD×Dのネタを絡めて見ました。

Act 0 失われた刻を奪り還せ！？

「い、今のは！？」

割れた空間の先に在ったのは、銀と一誠が闘う前の光景だった。
美堂蛮、天子峰猛、グレイフィア・ルキフグス、リアス・グレモリ
ーが見つめる中で、銀は煙草を口に咥えながら朗らかに告げる。
「本当に強くなったな、一誠」

「ジャスト一分だ。いい悪夢見れたかよ！」

「邪眼　？今のが　！？」

（幻！？　さっきまでの全てが？）

銀のセリフに呆気にとられていると、『グラウンド・ゼロ』にさっ
きまでとは違う違和感が顕れる。

「！」

「迎えが来たな」

「ああ」

「こ　これは　！？」

「天国に繋がる階段だ。お前は選ばれたんだよ。『悪鬼と化し
た神と悪魔の闘い《オウガバトル》』の勝者は、兵藤一誠だ！」
振り返るとそこには天へと繋がる真っ白な階段が出来ていた。

「ちよっと待ってよ。全然解んないよ！銀ちゃんは負けてないし、

「そもそもオレと銀ちゃんは闘ってないよ!？」

「親父イ　見てたよな？俺が『一悪鬼と化した神と悪魔の闘い《オウガバトル》』で負けたとこ」

「　ああバッチリな!」

「誰が何と言おうとお前の勝ちだ。一誠!」

「叔父さんまで　」

（嗚呼　大人の事情的ニオイが　）

「一誠君　」

「!」

「これまで二人が生きてきた日々のすべてを懸けた闘いだっただわ。

　貴方は銀を信じて命を懸けた。そうでしょう?」

　グレイフィアは、腰まであるその銀髪を払いながら、悠然とそれについて諭すように語りかける。

「それは銀も同じ　。　銀も　　貴方を信じ命を懸けたの」

「　」

「グレイフィアさん　」

「これはね一誠君。信じ合う二人によるお互いのための闘い　。
お互いが相手に勝ってほしいと願う不思議な闘いであり、『絆』を
奪り還すための闘いなよ」

その言葉を聞いた瞬間。一誠は胸の内が少し軽くなったような気がした。幻の中で見せられた一方的な攻撃の中でも見入ってしまったような温かい眼差し。自分の敗北を告げながらも優しい笑顔を浮かべる銀が心に引かかったままだったのだ。

「雷帝でも何でもなく、お前はお前の力で俺に勝ったんだ。だから、
胸張って自慢していいぜ?」

「銀ちゃん　」

そんなシリアスな空気ですが。

「　そうするとオレがGBのNo1ってことになりますよ?」

一誠の一言で銀の身体は一瞬のうちに強張った。
恐怖を隠そうとせず、ダラダラと汗を流しながら一誠は言葉を続ける。

「ぎ 銀ちゃんの無敵伝説が終わりますよ。美堂銀ってオレに負けた男なんだよ〜って言いまくりますよ？」

心臓の音が高鳴る。その言葉一つ一つに肩を震わせる銀に恐怖指数は高くなる一方だ。

「二番の男ですよ〜？準優勝ですよ〜？」

ブチッと嫌な音と共に一誠はいつの間にか頭と足首、身体の両端を銀に捕えられひたすらに回転の餌食となる。それはもう、今世紀最大のヤケクソっぷりで。

「うるせエ！俺様がテメエの勝ちって言ったらテメエの勝ちなんだよ！！文句があるなら言ってみろやコラア！」

「あだだだ！ゴメンなさいゴメンなさい！！」

「俺様に逆らうとどうなるか解ってんのか！」

「心なしか不条理の念を禁じえませんが銀ちゃんの言うとおりだと思います！」

「あれでもイツセーの勝ちなの？」

「うん勝ちなの。たぶん」

大きく振りかぶって地面に叩きつけた後、一誠に向って宣告する。

「いいからお前は上に行け！それがお前の最後の仕事だ！」

「いてて 仕事って？」

「『一悪鬼と化した神と悪魔の闘い《オウガバトル》』の勝者はただ一人。その勝者のみがこの階段を上りセカイの創生を司る」

「それが、オレの仕事？」

「そうだ。お前が何をしたいのか。どんなセカイを望むのか。それを決めるために『上』へ征け。そして、すべてを見て、お前自身で考える」

「『上』って？」

「この階段の頂上には森羅万象の源　『バビロンシティ』がある
。そして、お前の両親が、そこで待っている！」

「オレの本当の両親が、あそこに　」
天へと続く階段を見据えながら、その瞳に浮かび上がるのは遠い日の記憶。

『寂しそうな面してんのな、お前　』　『やっと見つけたぜ。ボウズ、名前は？』

自然と視線が向くのは美堂銀と天子峰猛。

（お前の本当の両親は、『バビロンシティ』にいるんだ）

「オレは　「オレは、じゃなくてさっさと征け！」
「嗚呼！」

「どっちにしろテメエが征かなきゃセカイ自体が消えちまうんだよ」
「だ　だってエリスちゃんもそこにいるんだよね？そしたら銀ちゃんも一緒に征けがいいじゃん！」

「テメエは人の話を聞いてねエのか！？『上』に征けるのは一人だけなんだよ！」

「でもそれじゃエリスちゃんは　」

「いいんだよ」

「！」

「一誠　。俺が案内してやろう」

「叔父さん　」

「征こう　一誠」

「で、でも、オレ、銀ちゃんと　」

それでもなお一誠は拒もうとする。が、

「やれやれ、困った創造主ですね」

振り返るとそこには赤屍蔵人がリアス・グレモリーの首筋に血塗れの剣を当てていた。

「さつさとオトモダチの言葉に従ったほうがよろしいですよ一誠君？さもないと命の恩人である彼女の命が断ち切られることになる」

「赤屍　！！」

必死になって駆けだそうとした瞬間、一誠の肩を強い力で銀が掴む。

「！」

「征け　一誠。この場合は俺に任せろ」

「銀ちゃん」

「お姫様を奪り還すナイトのポジションは譲らないぜ。それに信じるよ俺を。GBとして」

「　　うん！」

その一言と共に、一誠は階段を駆け上り始めた。その後に、天子峰も続いていく。

彼らを見送った途端、周囲の景色は荒廃した砂漠地帯から様々なパーツに囲まれた不気味な建物の中に移動した。

「これは？」

「兵藤一誠が『上』に征ったことで『グラウンド・ゼロ』の扉が閉じたんだ」

確認が終了すると、赤屍は剣をそっとリアスの首から下ろした。

「失礼しました。紅髪の滅殺姫」

「ありがとう、赤屍。これでいいのね銀　？」

「ああ　くせエ芝居させて悪かったな二人とも　。こうでもしねエと一誠のヤツは征きやしねエからな」

「クス　貴方は実に面白い　。こちらの行動を予期した上でそれ

を利用するとは」

「俺にはもうほとんど時間がねエからな」

「」

「やはり、そうだったか」

「」

「時間がないってどういう意味？」

銀の様子に不安を感じたリアスは訝しげに問いかける。

「銀？」

「4度目の邪眼を 使っちまったからな」

（銀よ。邪眼は24時間で3度までだ。それ以上は使ってはならぬ。邪眼は人の運命をも動かす法術。その代償として、不現の瞳を持ち生まれる者は己が天命に従わねばならぬ。その禁を破ればお前はこの世から消える）

「ウソ でしょ？」

「ウソじゃねエよ。完全に消えるんだよ。人々の記憶の中からも跡形もなく消え失せる。それが不現の瞳を受け継いだ者の宿命なんだとよ。悲しまれることさえなくなるんだからな。悪くねエだろ？」

銀は嗤う。今までの自分を悔やまぬために。しかし、

「イヤに決まってるじゃない、そんなの！！」

リアスは怒っていた。辛いはずなのに嗤っている銀に。そして、そんな銀をこの世に留めることができない自分に。悪魔の駒と呼ばれるシステムがある。かつての戦争で大きく人数を減らした上級悪魔達がチェスの特性を取り入れた少数精鋭の制度だ。軍団を持つ代わりに、「駒」として自分の下僕悪魔に強大な力を分け与えることができる。「駒」はそれぞれ「女王」「戦車」「騎士」「兵士」の属性があり、通常は一人につき「駒」一つだが、潜在能力値の高い者

は複数の駒を消費してしまう。「駒」を適正数与えられた者は、たとえ他の種族であろうとも悪魔に転生させることができるのだ。特に、リアスの「兵士」はウィッチクイーンの力ですべてが「変異の駒」に変化しているのだ。しかし、美堂銀は駄目だった。たとえすべての「駒」を消費しても彼を転生させることはできなかったのだ。しかし、それも「王」次第だとウィッチクイーンは言った。「王」の力が上がれば彼も転生させることができるだろうと。でも、現在の彼女の力では無理があつた。だからこそ、彼女は無力な自分が赦せなかつた。

空間を無言の重力が支配する。

「」

「いやよ」

その現実を知りながらも彼女は言葉だけで抗おうとする。そんなリアスをそれまで沈黙を守っていたグレイフィアが悲しみの色に染まつた声で諭そうとする。

「リアス・グレモリー。これは銀が自ら選んだ道なのよ。私達にはどうすることも出来ない。これは、禁を破った者への掟なのよ」その言葉を聞いて今までこらえていた涙が溢れてくる。泣き崩れる訳ではない。嗚咽を漏らす訳でもない。ただ涙を流すのだ。そんな彼女を銀は優しく抱きしめた。ただ強く、深く、自分はまだここにいるのだと証明するために。

「銀」

いまはただ、二人ともお互いの体温を確かめていたかつた。

「ま、そういうワケだからよ」

「！」

一歩ずつ銀は彼のもとへ歩を進めていた。

「」

「最後に 付き合ってもらおうか赤屍」

「」

「、よろしいのですか？」

「デメエとはケリつけねエと、夢見が悪くなりそうだからな」

「私の存在価値が何なのか、貴方なら答えてくれそうですね」

「ああ」

「イワしてやんよ赤屍」

「慈悲として、消える前に殺してあげますよ」

これからが本当の闘い、『悪鬼と化した死神と悪魔の闘い』《オウガバトル》のはじまりだった

A c t 0 失われた刻を奪り還せ！？（後書き）

この小説、読んでくれている人はいるのだろうか？

A c t Ⅰ 失われた刻を奪り還せ！？（前書き）

話が進まない！？

Act 0 失われた刻を奪り還せ！？

「今度こそ見せてくださいよ。貴方の真正正銘の本気とやらを」

「上等だ。テメエこそ底を見させてもらうぜ！」

あらゆる機材に繋がるパイプ。モトーンの床の上に立つ二人を囲むのは、現在も稼働する機械群と三人の観測者たち。一秒毎に重くなるプレッシャーが空気を圧迫する中、渦中の二人は微動だにもせず沈黙を守っていた。

「銀」

リアス・グレモリーが沈黙に耐えきれず、美堂銀の名前を呼ぶ。だが、銀は既に赤屍蔵人とフィールドを形成しており、その視線と言葉には気づかない。

だが、一時間以上に感じる一分未満の長い短い沈黙にも終わりが訪れる。それを察してか三人は全員胸の内でカウントダウンを始める。

(3)

しかし二人は、カウントダウンが始まってでも動くことせず、一分たりとも隙を見せない。

(2)

それでも場の空気だけは二人を中心としたフィールドに収束していく。沈黙は重たく、空気は厚く、空間を支配する。

(1)

予兆など見せない。一秒が終わる瞬間、零が始まる寸前。その交叉こそが二人の悪鬼を動かした。

5メートル

その距離を爆走する間にも拳はぶつかり合う。見る必要なんてない。確認するまでもない。どうせお互いにそこまでの先読みは重なっているはずだ。一手一投足。その全てが計算されたレールの上に行く。身体全体を使つての疾走。そこから生み出される超真空。それこそが莫大なエネルギーを生み、行き場のないそれは爆発するしかない。

「!？」

「くっ」

「な　なによこの衝撃波!!こっちの身が碎かれるわ!!」

突如発生した高圧力の衝撃波は、床を削り、傍観者の三人に牙をむく。

「かつての貴方”バトルの天才”　美堂銀と、イレギュラー”魔

人”　赤屍蔵人の闘いが間近で見られるのです。命を懸ける覚悟で留まりましょう」

「　そうだな」

ウラアアアアアアアアアアア

空間に響く気合いがこもった叫び。疾走が交錯した瞬間。拳戟は混

じり合い、次の瞬間には別の場所へ。それでも、お互いがどの場所にいるかは確認し、向かい合って激突する。自分が放った必殺のコマンドが相手の必殺とぶつかり合い、その終了を見るや、間髪いれずに次のシークエンスへと入る。

「さ 3連続でこれほどの攻撃を」
「いいや 30連続だよ」

！

「一撃ごとに100のオプションを組み入れている。いや 俺の見える範囲内での話だからな。実際はその10倍は手を出してやがるかもしれねえな」

「3000つてこと ！？」

「銀の野郎の大マジの本気は久しぶりに見るが、この様子だとこいつはマジでグレイフィアや赤屍と互角のどこまで来やがったな！銀の奴は もうお前の手の届かないところにいつちまった」

それを聞き、なおも自分の無力を噛み締めながら、胸に手を置きりアスは呟く。

「銀」

「まさかと思いますが銀君。手数だけでこのバトルの決着がつくとも思っているのですか？だとしたら残念でなりませんね。連続攻撃とは油断やスキを引き出すための繋ぎにすぎない。高度な闘いにおいて効果があるのは『意味のある一撃』これを置いて他にない」

「なら 喰らってみるやア！！」

スネークバイト

突き出すのは右手『蛇咬』。しかし、200kgを超える握力は同じく右手を突き出した赤屍の掌より出現した円環のメス群とぶつか

って防がれる。

ブラッディ・シールド

「『赤い楯』」

「ウオオオアアア!!」

それでも突き出した右手はメスを砕き、貫く。

「デメエのことは」

その後、背後に回った銀は振り返る瞬間に脚に強大な力を込め、

「最初っから」

『聖痕』によつて増幅した力を右手に込め、

「気に食わなかったんだよ!!」

突き出す!!

「衝撃が熱に転化しやがった!!」

「決まったの!？」

水蒸気が晴れた先にあつた光景は、

「足りま せんね」

右手を突き出すも一寸届かず、深紅の魔剣によつて腹を貫かれた銀の姿だった。

「1ナノメートル 10億分の1メートルほど踏み込みが」

「銀ー!？」

「チッ」

剣を引き抜かれたことによつて自由になった銀はなおも戦闘のオプションを取り続ける。

「思い出しますね銀君。初めてお会いした時のことを。あの時は『アーカイバ』の描き出す“世界観”の差を考慮しても、貴方はまるっきりの坊やだった。今は強くなった。それは認めましょう。『神器』の使えないこの無限城の中でこれだけ戦えるだけでも十分なくらいには。だが それでもまだ足りない。ギリギリの闘いではこの差が意外と大きいのです」

深く抉りこむような深い深い蹴り。しかし、それは簡単にかわされ、立ち上がる間もなく冷たい剣身が首筋にあてられる。

「これが 私と貴方の差です」

だが、

パアアアアアアアン！！

赤屍の帽子は時間差で襲いかかってきた掌撃によって吹き飛ばされ、額からも赤い筋が一つ流れる。

「チツ、あと1ナノメートル踏み込んでくれりゃあテメエの首を飛ばしてやれたのによ」

「これは、失礼」

剣をどけ、帽子を拾いに行きながら、死神は理解する。

「やはり貴方は侮るべきではありませんね」

目も前の悪魔が、かつて自分の底を暴いた男の息子だということを。

「最後なんだからもうちょい楽しもうぜ お互いによオ」

「」

兵藤一誠は駆け上がる。汚れを知らぬ天国に続く純白の階段を。

「この気は！？」

「闘っているな」

「うん」

階下から感じる強烈なプレッシャー。それは銀と赤屍がぶつかり合っている証だった。

「今までにない物凄い気を二人から感じる。二人とも今度こそ本気で闘っているんだ」

「これは運命の闘いなどとは違う」

「！」

階段の先から聞こえた声に振り向くとそこには、ウサギの人形を抱えた少女が立っていた。

「これは二人の意志　。己が欲望を満たすために自ら選択した道だが、キミと彼等は違うのだよ。新たな『創生の王』」

「キミは　アメの女の子？どうしてここに？」

「私は間久部　。キミを　『バビロンシティ』へと導くためにここで待っていた」

「間久部？まさかMAKUBEXの？」

「MAKUBEXか　アレには可哀想な事をした　」

「　」

「来らしていたんですね間久部博士」

「久しいな天子峰。どうやらキミもすべてを思い出したようだね」
「はい」

「叔父さん、思い出したって何を　？」

「征くぞ『創生の王』、この階段を上れば辿り着く　」

「　、辿り着くって？」

「すべての、真実に　」

A c t 0 失われた刻を奪り還せ！？（後書き）

ではまた次回

Act 0 失われた刻を奪り還せ！？（前書き）

「銀ちゃん！？」

兵藤一誠はそれまで順調に駆け上がっていた階段を振り返り下りて行こうとする。

が、駆け下りていく一誠の腕を天子峰が掴む。

「どこへ行く気だ、一誠！？」

「銀ちゃんが！！」

「キミが下界に降りればセカイは変わってしまう。解っているのか
『創生の王』？」

「違う！！オレは、オレは今までもこれからGBのナンバー
2だ！負けを認めたらその時が本当の負けだって、言ったよね銀ち
ゃん」

そして、祈るように一誠はここにはいない相棒に語りかける。

「銀ちゃん 諦めちゃだめだ　！！」

Act 0 失われた刻を奪り還せ！？

「興奮してきやがったぜくそつたれ！！マジで互角だよ あの赤屍と！」

「銀！」

「タンマ！」

激しい一戦の後、二人はまた最初の位置に戻り、向かい合う。

「一服するわ」

そんな状況にもかかわらず、銀はポケットから取り出した煙草で一服しようとする。ライターで火を付けた後、それを吸う様は完全にヘビースモーカーのそれだ。

「 実に面白い 。貴方という男は本当に 。改めて覗いてみたくなりました。美堂銀という男の『底』を」

その言葉と視線。それが銀に向けられる。たったそれだけのことで、場のプレッシャーが重くなる。人体に害をなす、と思わせるその領域まで。

「銀君 貴方は素晴らしい。貴方達と出逢えたことを神に 、あるいは悪魔に感謝したい」

「な なんなのよ！？この魂を抜かれるような感覚は？あの二人を

見ているだけで力が」

倒れそうになったリアスをグレイフィアが支える。上級悪魔であるリアス・グレモリーがこの様なことから、場の相当な圧迫感が窺える。

「赤屍が 本気になったの ！？」

「いえ まだですね」

リアスの焦燥とした問いに、グレイフィアが余裕淡々と答える。

「銀と戦い 、自分が斃されることは可能性としてイメージしたかもしれませんが、しかし、それでも彼はまだ自分の『死』をイメージ出来ないでいます。超越者である赤屍にとって イメージ出来ないことは起こりえません ！！」

「赤屍は絶対に死なないってこと？」

「いえ ですが赤屍にはまだ余裕が残っています。ですが 銀には」

赤屍の放つ尋常でない”魔人”と呼ぶにふさわしい気迫に、銀は冷や汗を流してしまう。

「この勝負 もう決着は見えているのかもしれませんが」

「そろそろ よろしいですか？」

その一言で再開されるデスマッチ。ただの移動がいたる所に真空を作り、その衝撃波がステージを破壊する。

「移動するだけでこの衝撃かよ ！？」

「このバケモンが！！」

すれ違いざまの斬撃。それらを跳躍で回避し、バトルステージを一旦、渡り廊下から下の広場に代える。

「それはお互いさまでしょう」

「！！」

引き離したと思っていた人物が背後に回っていたことに銀は驚愕と汗を浮かべる。

「ただ貴方は人間であろうと願うあまりに自分の限界を作ってしまった

っている。その甘さを捨てなければ限界を超えることはできない」
背後からの斬撃を寸でのところでかわし、『聖痕』で増幅させたア
クレスピオスの力を右手に込める。

「ご自身が悪魔の化身であることを認めれば 貴方は一皮？ける
可能性を秘めているのですよ？悪魔も人も大した差はないではない
ですか。人間など 悪魔との取引で誕生した汚れた生物なので
から」

さつきよりも力を込めた拳を前へ。しかし、赤屍に向かって放たれ
た渾身の一撃は、無情にも受け止められてしまう。

「認めてしまいなさい。そしてこの私に一太刀浴びせてごらんなさ
い。そうすれば私もせめて苦しめずに貴方を殺してさしあげま
すよ」

そう言った赤屍の返しの斬撃。拳で繋がっているために、かわすこ
とも出来ない。

「銀!!」

”ネエ、私ヲ殺スタメニ悪魔ニナツテクレル?”

(クソつたれ !!)

(もうじき消えちまうつてのに、この期に及んでエリスのあんな言
葉しか浮かんでこねエのかよ)

(俺に憎めつてのか？自分を愛した女を)

(そうすればあの言葉どおりに悪魔としてこのバケモンと対等に戦
えるってか?)

度重なる追撃。その光景は幻の中で起きたワンサイドゲームそのも
のだった。赤屍の一方的な剣戟をただ受けるだけ。防御の姿勢も取
らず、それでも何故か立ち続ける。

(俺は エリスに謝りたかったのか?)

(『上』に征けば許されると思ってたのか?)

(でも結局 『上』に征けば逢えると解ってて俺はその権利を一誠

に)

(いや 譲った訳じゃねエ)

(俺はアイツに負けたんだ)

(俺はエリスを信じる事ができなかった)

(逢えばきつとあの時みてエな言葉を投げつけられるんじゃないか
って)

(だけどアイツは違った)

(アイツは最後までこんな俺のことを信じ続けていやがったんだ)

「どうしました銀君？このままでは私も少々がっかりですよ。本気を出した貴方の力がこの程度とは。 それでも楽しめた方かもしれない。 弱者への哀れみとはこういう感情なのかもしれない。 もう終わりにしましよう、銀君」

それまで剣だったものを廃棄し新たなる武器を創造する。

『ラッディ・ランス
赤い槍』

「銀!!」

「やめなさい、リアス・グレモリー」

「銀はもう立ってるのもやっとなのよ!?このままじゃ本当に死んじゃう!!」

「信じろよ」

「!!」

それまで沈黙を保っていた壘が口を開く。

「GBの名を継いだ男の力は、ダテじゃねエよ!!」

「サヨウナラ 美堂銀」

死刑宣告を下した死神は処刑道具となった深紅の槍を構え、砲弾のようなスピードで突き進む。 誰の目にも銀の死は明白だった。 だが、
「誰が」

その未来は、

「弱者だつて？」

覆される！！

『！？』

誰もが自分の眼を疑った。銀がその胸を貫くはずだった槍を粉々に破壊した。それはいい。だがしかし、それを成した後の銀の姿が異常だった。右肩から具現化したのは、アレスピオスの力が昇華して復活した地獄に下る前の天使の翼。純白の翼は羽根を散りばめながら神々しく君臨する。そして、左肩より具現化した悪魔の翼。今までハーフデーモンゆえ不安定だった母方の血筋はすべてを受け入れ、信じ、乗り越えることによって覚醒する。夜より暗い黄昏の翼は禍々しくも降誕した。

「デメエが俺様に勝とうなんざ100万年早エんだよ！！」

「あれは」

「銀」

「なるほど。悪魔であり天使でもある。地獄に堕ちてもその輝きを失わない真正正銘の堕天使。それが貴方の強さですか」

「うるせエよ」

「！」

「デメエが俺様より強エと思ってんのが気に入らねエだけだ」

堕天使は右手の親指を垂直に下に向けて挑発しながら宣告する。

「デメエは俺様が、堕とす！！」

A c t Ⅰ 失われた刻を奪り還せ！？（後書き）

「行こう叔父さん」

「！」

「本当に良いのか？美堂銀の危機を感じたのでは」

「もう心配はいらないよ」

「銀ちゃんは G B のナンバー 1 はきっと勝つ！！」

A c t Ⅰ 失われた刻を奪り還せ！？（前書き）

文才がないな。

ここで一つ疑問。

サーゼクスのお奥さんどうしよう。
なにも考えてないや

Act 0 失われた刻を奪り還せ！？

「 堕とす？この私を？」

そう呟いた赤屍の手には先ほどの交叉の際につけられた傷から血が溢れていた。紅は溢れ、溜まり、流れ、玉となり、落ちて、筋を作る。筋から生まれ、筋を作る雫を掴むように、一滴一滴と落ち続ける紅い玉を掬いあげるように魔人は固く拳を握りしめる。

「貴方達は 本当に面白い 。もう少しです銀君 。貴方が本気を見せてくれることで 、私もようやく久しぶりに私自身の本気を見ることができる」

言葉を重ねる死神の表情は今までにないくらい酷薄で、幸福で、辛辣で、喜悦で、悲哀で、感動で、苦悩で、爽快で、まるで世界の全ての感情を掻き集めたかのように、人の一生における総ての思い出を込めたかのように唇の両端を歪ませていた。笑っていた。嗤っていた。藁つていた。晒つていた。微笑つていた。嘲笑つていた。無邪気に、快楽に、自然と、追憶し、予期し、待ち焦がれ、その心を歪ませていた。溢れ出した殺意は破綻していた。破綻していたモノを受け入れていた。受け入れた容れ物は歪んでいた。だからこそ赤屍は人間だった。たとえ世界を超えた超越者だったとしても、人を殺すことに躊躇いがない死神だったとしても、絶大な力を宿した魔人だとしても、闘いを通じて自己を得るバトルジャンキーでも、その姿は人間だった。その異端としての在り方そのものが人間だった。

まだ人間の中の異端として在れた。その異端は人間としての異端だった。

「鏡形而も、来栖杵も、蟬丸も　あの雷帝でさえ私を本気にさせることは出来なかった」

強者との戦い。ただ自分の底を知りたいがための一方通行の愛情。だが得られるのは虚しさで怒り。お前たちはそこまでなのか、私と対等にさえなれないのか、そんな思いから来る絶望。巡り会えた猛者でさえ勝つのは自分。傷を負うことさえなく、始まるのは一方的な虐殺。

「さあ見せてください。貴方の力を」

だが、ようやく出会えた。自分と対等に戦えるであろう存在。悪魔天使。どちらとも呼べない原初の墮天使。闘いの中で何度も見た彼の底。しかし、彼は立ち上がった。拳を交えるたびに強くなる。闘いの中で大きくなる強さ。限界なき魔天楼。いまだ完成しない成長する者が持つ底とは呼べないどこまでも広がり続ける大空。

「そして教えてほしい」

さあ、見極めよう。私の底を。貴方の果てを。ここからが本番だ。第二ラウンドはもういらぬ。

「赤屍蔵人の真の力を――」

ならば応えよう。審判の役目を背負った天使として。聖痕に刻んだ絆に懸けて。そして刻みつけよう。新たな聖痕としてこの闘いの行く末を。お互いの底と果てを。今まで紡いできた己の歴史を。

「オシエテやるぜ。本当の　美堂銀を――」

舞い降りた墮天使が生む衝撃波。ズレが起こす幻想の破壊領域。交叉するは実体を持った幻想の蛇と流れるように生産される赤き刃群。本体と実体を伴った残像による時間を超越した同時攻撃。極限を超えたスピードは瞬間的ながらも1と0で表わされる領域を超える。天使と悪魔の左右非対称な翼はそれぞれ腕と同化してその力を振るう。その衝撃波は不思議な色合いを醸し出し観客を魅了する。それ

こそが創世へと向かう破壊の光。

「綺麗　。私は魔王の妹としてたくさんのレーティングゲームを観測してきたわ。その一つ一つが命懸けの闘いだった　。だけどこれほどまでに凄絶で美しい光を放つ闘いは見たことがない」

紅髪の少女はその闘いに夢中になりながらも感嘆の言葉を漏らしていた。その内にあるのは恐怖でも喜悅でもない。それは感動。闘争という本来は野蛮とさえいわれる生物の本能が芸術の領域を超えて顕現しているのだ。

「なんていう生き様　なんていう二人　。これが　魂の輝き
！！」

「あ　あのクソバネが押されてやがる　！！あのジャッカルが俺らGBの四代目に！！」

（見てるか銀次！俺らの名を継ぐ男たちは―俺の息子は本当にすげえ男に育ったぞ！！最高の男に　！！）

美堂蛮はこの世界には存在しない相棒に向かって叫ぶ。かつての自分が辿った道を自分を超えて突き進む息子の存在を伝えるために。もう会えないからこそ、自分たちの後継がかつての自分たちを超えたことを喜びながら。

（お婆様　、マリーア　、卑弥呼ちゃん　。私と蛮の子はこんなに大きくなりました　。こんなにも　強い男に　）
グレイフィアは思う。かつて平行世界に跳び、そこで世話になった人々のことを。神と悪魔と堕天使。三つ巴の大戦。その戦いの中で手に入れた鞘によって巡り会ったことはまた違う世界の物語。そして、帰ってくるときに一緒についてきてくれた愛すべき人。永かった。ここまでくるまでに壮大な時間をかけた。帰ってきてから出逢った世界の真実。この世界のお婆様。旅行に来ていた際に偶然お婆様に弟子入りした現魔王の妹。一時期は家族として共に暮らし

たこの世界の雷帝。日本に来てから開いた喫茶店。夫と同じ役目を背負って生まれてきてしまった3番目の子供。かつて出逢った平行世界と同じこの世界での彼らとも出逢えた。だからこそ、涙を流すことができる。次の世界に継がせることができる。

「銀　　！！」

（今だけは貴方に祈ってもいい。神様お願い　銀に力を――！！）
リアスは振り返る。師と出逢ったときに得た初恋を。初めての恋ゆえの嫉妬を。その果ての後悔を。ずっと支え続けるという約束を。彼を救うことができない無力を。無限城で出会った数々の朋友を。だからこそ刻む。死んでもこの一瞬を忘れないために。

上段への斬撃。利き腕の破壊。誰もが理解した。次で終わると。それこそが世界を、次元を超越した一撃。お互いの踏み込みがもたらす結果。大気が渦巻く中で放たれる拳撃と剣撃。墮天使と死神が入力したラストコマンド。お互いの全てを懸けた必殺の一撃。交叉した視線の後に訪れるのは空間を破壊した衝撃波。そして無音。支配するのは沈黙。その場にいるもの全員が固唾を飲んで見守る中、結果は突然訪れる。突然というくらい自然だっただから最初は何が起きたか解らなかった。そしてようやく理解する。美堂銀が鮮血と共に倒れたということ。

「銀――！！」

駆け出したリアスが銀を受け止める。愛しい人の生死を確認しながら。

「銀――！！　しっかりして銀――！！」

何度も何度も無言の銀に呼び掛ける。絶対に失いたくないからこそ。

「銀君　確かに垣間見ましたよ。貴方の果てを　。」

なおも立ち続けながら赤屍は続ける。

「そして　私の底というものを　」

満たされた表情の後に撒き散らされる魔人の鮮血。その鮮血さえも

帽子を残して消えていく。存在の消滅。死神が死を実感した瞬間だった。

「赤屍が」

「消えた」

呆然とする一同の中で妙に子供っぽい声が響き渡る。

「だから 言っただろうが。俺様は強エんだよ！」

汗でびしょ濡れになりながらも爽やかな笑顔を浮かべる男がそこにいた。

「ワリイ親父や二切れた 一本くれ！」

「！」

そんな状況でもいつもの態度を崩さない息子に蛭は懷から上物を取りだす。

「ったくお前は、本当にとんでもねえヤロウだな」

「ヘッ」

鼻で笑いながら銀は煙草を受け取ろうとする。

「最後に悔いだけは、残したくなかったからな」

その腕は透けており、もう存在自体があやふやだった。

「ぎ」

「おつと そろそろ時間がきやがった」

（お前はこれから多くの不幸を背負って生きていくだろう。それが蛇遣い座を宿す者の宿命）

「いや そうでもねエよ」

今は亡き義祖母の言葉を思い浮かべながら呟く。

「悪魔だったけど誰よりも人間らしい綺麗な母親が近くにいたし

俺と同じ存在だとか意味わかんねえけど俺に背中を見せてくれる破天荒な親父が傍にいたしな」

最愛の人の手を心の全てを伝えるかのように強く握りしめる。

「それに お前に逢えたしな」

「銀」

その綺麗な触り心地のいい紅髪をくしゃりあげながら、諭す。

「泣くなよりアス。俺は後悔なんてしてねエよ。悲しいのは今だけだ。俺という存在が消えれば悲しみも消える 夏の日の通り雨見てエによ」

（本当ですか ？）

「！！」

「この声」

（！！）

空間全体に響いた消えたはずの赤屍の聲。その声と共に銀の胸には一本のメスが刺さっていた。

「ヤロウ」

「銀ー！！」

あたりに響いたのはリアスの悲痛な叫びだった。

A c t 0 失われた刻を奪り還せ！？（後書き）

次回から一誠パートです。

謝罪

すいません。諸々の事情で、更新することが出来ず、この小説は打ち切りとさせて頂く事にしました。

ただ、現在は私の相棒が手伝ってくれて、別の二次創作の構想を練っていますので、そちらの方を優先させていただく形となりました事を切にお詫びします。

尚、これより下はただの字数稼ぎです。

あああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9568w/>

ハイスクールG×B

2011年12月5日19時47分発行